

全学を対象とするオーダーメイド英語教育

— 「基礎からのやり直し英語」 —

Across-the-campus Order Made English Education
at Aichi Shukutoku University:
Summary of the English for Beginners Course

太田直子
OHTA, Naoko

若山真幸
WAKAYAMA, Masayuki

二村慎一
NIMURA, Shinichi

石橋千鶴子
ISHIBASHI, Chizuko

福本明子
FUKUMOTO, Akiko

小沢茂
OZAWA, Shigeru

樗木勇作
OTEKI, Yusaku

山田久美子
YAMADA, Kumiko

マックゴールドリック・ジェマ
McGOLDRICK, Gemma

中郷慶
NAKAGO, Kay

太田晶子
OTA, Akiko

1. はじめに

2003年度までの愛知淑徳大学における英語教育は、各学部独自のカリキュラムで行われており、それをサポートする形で、外国語教育センターがモチベーションの高い学生のために「Intensive English」「上級英語セミナー」「ASU TOEIC」などの科目を学部の枠を超えて全学に向けて開講していた。しかし、学部ごとに行っていた英語教育の共通部分を、全学共通のものにしようという気運が高まり、その方向性とカリキュラムの検討が全学英語教育運営委員会（以下本委員会）に委ねられた。検討の結果、2004年度から「英語コミュニケーション1」～「同8」「ASU TOEIC」「上級英語セミナー」の10科目が全学共通授業科目「言語活用科目（英語）」として設けられることになった。

また、本委員会では、2003年度から4年間にわたり「大学教育高度化推進特別経費（教育・学習方法等改善支援経費）」を受け、データベースを活用した独自のチュートリアルシステムを構築し、授業科目以外にも学生に対してさまざまな英語教育を展開する「英語学習サポートプログラム（ASU English.com）」を整備してきた。「英語学習サポートプログラム（ASU English.com）」は、さらに英語力を伸ばしたい学生のためにライティング指導を行う「ASU Writing」¹⁾と、TOEIC 400点未満の学生に対して英語学習相談と学習サポートを行う「ASU English Tutorial」²⁾から構成されている。

- 1) 「ASU Writing」はインターネットの電子掲示板を利用したライティングコースである。ビジネスで必要とされる英語をテーマとする「WL」と、現代生活におけるさまざまなトピックをテーマとする「WS」の2コースがある。WLはTOEIC 600点以上の学生を対象に、事前・事後セミナー（各5時間）を実施し、その間に2回の課題添削を行うものである。WSはTOEIC 470点以上の学生を対象に、毎週与えられたテーマに従って意見を表明し、電子掲示板を使って意見交換を行うものである。
- 2) 「ASU English Tutorial」はインターネットの電子掲示板、e-mail、個人面談による英語学習相談制度である。原則週1回、1人あたり1回3時間×6レッスンのセミナーと電子掲示板、e-mailによる英語学習指導を行う「TL」と、電子掲示板、e-mail、直接面談による英語学習指導を行う「TS」の2コースがある。TLはTOEIC 400点以下で、6回のセミナーに出席できることが参加条件である。

さらに、本委員会では全学英語教育のいっそうの充実を目指し、新プログラムを開発した。「多文化共生を目指した発信型全学英語教育—モジュール化された体系的カリキュラム開発—」というプロジェクトは、文部科学省の2005年度現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）の選定を受けた。現代GPへの選定により、多角的なアプローチを含む英語科目が授業科目として提供されるようになった。

このように、本学では、本委員会が主体となり、全学を対象とする英語教育を多角的に運営・実施してきた。その教育成果は学生のTOEICスコアの伸びをみると明らかであるし、英語に対して興味を持つ学生が多くなったことも確かである。

全学で7,600名を超える学生の英語力は、初心者レベルから上級者レベルまで多岐にわたる。これらの学生全員に対して、それぞれの学生のニーズに応じた授業を提供すること、社会に出たときに役立つ（それなりの）英語運用能力を身につけられるようなカリキュラムを構築すること、電子カルテや英語学習相談を活用した英語学習サポートを提供することが本委員会に課せられた使命である。しかし、本委員会が行ってきた各プログラムは、英語が得意な学生や意欲的な学生に対してさらなる学習の場を提供することに重点を置いていたという点は否めない。いわゆる大学全入時代を迎え、日本の大学は大きな転機を迎えている。ゆとり教育世代の学力の低下も大きな問題となっている。本学も例外ではない。入試形態の多様化によって英語基礎力のない学生が大学に入学してきているという事実にもどのように対処すればよいかというのも、本委員会が直面した課題であった³⁾。そこで、本委員会では、英語を勉強しなおしたいのだがどこから手を付ければよいか分からないという学生のために、中学校・高等学校レベルの基礎英語を学び直す「基礎からのやり直し英語」というプログラムを開発した。「基礎からのやり直し英語」は、愛知淑徳大学の2005～2006年度「研究助成（特別教育研究）」を受けた「全学を対象とするオーダーメイド英語教育の拡充」の中で開発・実施されたプログラムである。本取組は、2007～2008年度の「研究助成」も受けることになり、2008年度現在も実施継続中である。

小論は、2005～2007年度の「基礎からのやり直し英語」の実施報告である。

2. 「基礎からのやり直し英語」の概要と2005～2007年度までの実施報告

2.1. 「基礎からのやり直し英語」の概要

ここでは「基礎からのやり直し英語」（以下本プログラム）の実施期間や形態、運営主体、受講生の募集、面接の流れ、指導内容の記録、指導担当者について詳述する。

本プログラムの実施期間・形態は、2ヶ月を1つのタームとし、1年に5回（全5ター

3) 大学における英語力の学力分散については、小野（2008）を参照。小野（2008）は、大学生の英語力は1997年度の受験生から大幅に低下し続けているとし、大学生が「英検4級」や「英検3級」を取ることを目標とした英語教科書が21,000部の売り上げに達した事実についても述べている。

ム）、2005年から2007年度の3年で合計15ターム実施してきた。オンラインの学習履歴を活用した個別学習指導が特徴である。具体的には、1つのターム中に3回の面接での直接指導とその指導の合間に2回のメールによる間接指導を基本とし、オンライン上で確認できる学習履歴を踏まえた、学習者のニーズや進捗状況に合わせた英語学習（文法の復習）の指導を実施してきた。

本プログラムの運営には、全学英語教育運営委員会のメンバー、外国語教育センターのスタッフとプログラムスタッフがあたり、各タームの開始前には会議を開き、問題点の対応、改善点の確認を行ってきた。

受講生の募集には、スタッフと教員が冊子を作成し、年度の初めに新1年生を中心に配布し、必要があれば授業でも案内してもらい、全学部を対象として受講を呼びかけてきた。受講申込みは、インターネットのホームページ（<http://www.asuenglish.com>）上からできるように設定されている。申込みが多い場合は、TOEICスコアの低い学生から受講を認めていくこととした。

受講生の確定後、各受講生に指導担当者を割り振り、その指導担当者が自分の受講生へ連絡をとり、個別指導を開始する。第一回面接では、受講動機を確認し、受講生のニーズやペースに合わせた学習計画を立てる。その計画に沿って、受講生は課題をこなす。2～3週間後に指導担当者はオンラインで受講生の学習履歴を確認し、中間指導として、メールでアドバイスや励ましのメッセージを送付する。開始から1ヶ月経過した頃に、再び指導担当者と受講生の第二回面接を実施する。この面接では、疑問箇所の確認や必要に応じた学習計画の見直しなどの指導を行う。その約2週間後に指導担当者は受講生の学習状況をオンラインで確認し、中間指導として、メールでアドバイスや励ましのメッセージを再度送付する。タームの最終週に、第三回面接を実施し、疑問点の確認、プログラムの感想や今後の英語学習に関して指導を行う。

全ての面接やメールでの指導内容は3節で詳述する「電子カルテ」と呼ばれるデータベースに指導担当者が書込み、受講生の学習・指導記録として残され、履修している全学の英語授業やTOEICスコアとともに、在学中の英語学習指導にも活用されている。

プログラム開始の2005年度から2006年度までの2年間は全学英語教育運営委員会のメンバー（専任教員）が指導担当者として指導にあたっていたが、専任教員の負荷の緩和、受講生への迅速な対応、大学院生のキャリア形成への利点などの観点から、2007年度より本学の大学院生に指導を担当してもらっている。2007年度には、受講生の質問により迅速に対応するために「質問・相談コーナー」を設置し、曜日と時間を決めて院生が待機するという制度を設けたが、利用が活発でなかったため、翌年度には廃止した。

2.2. プリントコースとインターネットコース

本プログラムは、プリントコースとインターネットコースの2つのコースで構成され、学

生の希望やTOEICスコアに応じてコースを決定する。各コースの詳細を説明する。

プリントコースは、教科書を用いた添削指導が特徴である。タームごとに使用テキストが異なるため、複数回にわたり本プログラムを受講することが可能である。文法事項の説明の詳しさや学生の課題提出率などを参考に、使用テキストを見直している。プリントコースの大まかな流れとしては、プログラムスタッフが、受講生が購入した教科書のコピー（プリント）を用意し、受講生はそのプリントの問題を解き外国語教育センターに提出する。その提出されたプリントを、大学院生が添削をし、間違えた問題には解説コメントを書き込む。次にプログラムスタッフが、添削されたプリントをスキャナで読み込み、受講生の電子カルテに記録する。その後、添削プリントは外国語教育センターに届けられ、受講生が受け取りに来て返却される。夏季・春季の休業期間にあたるタームでは、プリントの提出と返却に、希望者には郵送で対応してきた。指導担当者は電子カルテに記録された添削プリントをオンラインで確認し、正誤のパターンや進捗状況などをふまえて、具体的なアドバイスや励ましのメッセージをメールで送る。

次に、インターネットコースについて説明する。インターネットコースの特徴はe-learning教材の活用にある。2005年度から2006年度の2年間は、学外からのアクセスが可能なチエル株式会社のCHJeru.netを活用した。2007年度以降は、株式会社アルクのALC NetAcademy 2への学外からのアクセスが可能となったので、CHJeru.netと併用して、学生のニーズや希望に合わせて指導担当者が教材と学習箇所を選択をしている。インターネットコースの大まかな流れとしては、1) 受講生が教材に学内または学外からアクセスし学習をする、2) 学習した日時と解答の正誤を含んだ学習の記録が教材上の履歴として残る、3) 指導担当者がオンラインでその履歴を参照して、面接やメールで指導を行う、というものである。

2.3. 受講状況

2005～2007年度の「基礎からのやり直し英語」におけるプリントコースおよびインターネットコースの各ターム受講生数は表1のとおりである。

プリントコース			インターネットコース		
年度	ターム	受講生数	年度	ターム	受講生数
2005	第1ターム（5月23日～7月24日）	32	2005	第1ターム（5月23日～7月24日）	6
	第2ターム（7月25日～10月2日）	29		第2ターム（7月25日～10月2日）	10
	第3ターム（9月26日～11月27日）	27		第3ターム（9月26日～11月27日）	7
	第4ターム（11月21日～2月5日）	17		第4ターム（11月21日～2月5日）	9
	第5ターム（1月16日～3月31日）	8		第5ターム（1月16日～3月31日）	3
2006	第1ターム（5月22日～7月23日）	23	2006	第1ターム（5月22日～7月23日）	23
	第2ターム（7月24日～9月30日）	28		第2ターム（7月24日～9月30日）	26
	第3ターム（9月25日～11月26日）	16		第3ターム（9月25日～11月26日）	9
	第4ターム（11月20日～2月16日）	16		第4ターム（11月20日～2月16日）	7
	第5ターム（1月15日～3月30日）	8		第5ターム（1月15日～3月30日）	6
2007	第1ターム（5月28日～7月22日）	20	2007	第1ターム（5月28日～7月22日）	20
	第2ターム（8月1日～9月30日）	21		第2ターム（8月1日～9月30日）	12
	第3ターム（10月1日～11月25日）	27		第3ターム（10月1日～11月25日）	11
	第4ターム（11月19日～1月27日）	21		第4ターム（11月19日～1月27日）	7
	第5ターム（1月21日～3月14日）	11		第5ターム（1月21日～3月14日）	9
合計		304	合計		165

表1 「基礎からのやり直し英語」各コース受講生数

本プログラムは何度でも受講可能であるため、複数回受講した学生も数名おり、表1にはのべ受講生を示してある。2005年度から2007年度の3年間で、プリントコースにおいてはのべ304名、インターネットコースにおいてはのべ165名もの学生が本プログラムを受講した。タームにより受講生数は一様ではないが、プリントコースでは1ターム平均20.3名、インターネットコースでは1ターム平均11名が受講したことになる。

3. 電子カルテについて

1節で触れたように、本プログラムは「データベースを活用した独自のチュートリアルシステム」における1つのサブモジュールとして開始した。そのため、プログラム開始時から「電子カルテ」と称するデータベースを指導に活用してきた。

3.1. 電子カルテの利点

電子カルテの導入利点は以下にまとめられる。

<プログラム管理者の利点>

- ・本プログラムのPDCAサイクル⁴⁾形成上の客観資料となる。
- ・大学院生が指導担当者となった場合、指導担当者の大学院生をさらに指導・監督する立

4) PDCAサイクルの教育現場への適用については田部井、飯田（2003）を参照。文部科学省によって選定が行われたSELHi（Super English Language High School）指定校の報告においてもPDCAサイクルを用いたプログラム評価が導入された報告があり、文部科学省主催の「英語が話せる日本人の育成」フォーラムでも研究発表が行われた（Benesse教育研究開発センター（2005））。

場の教員 (supervisor) の管理が行いやすい。

- 指導担当者が行うべき業務内容が電子カルテの項目となっているので、電子カルテに記入することで指導担当者のミスを事前に防ぐ効果が期待できる。
- 受講生の個人情報管理に優れている⁵⁾。

<指導担当者の利点>

- 指導担当者の指導効率を上げることが期待できる。
- 指導担当者が添削プリントのコピー等を閲覧するよりも迅速、かつ確実に学習状況得を把握できる。
- 指導担当者間の指導上の質および量に関してピアレビュー (peer review)⁶⁾ の機会となり、指導技術の向上が期待できる。
- 受講生が複数回受講した場合、指導担当者は指導履歴を参考にして受講生にあった指導を選択できる。

<受講生と指導担当者の両方の利点>

- 受講生と指導担当者が面接時に電子カルテを使うことで、受講生の苦手なポイントや得意なポイントに関する情報を共有できる。
- 受講生と指導担当者が電子カルテの添削プリントを確認しながら面接できる。

上に挙げた利点で受講生のメリットが一見したところ少ないように思えるが、個々の受講生にとって、当該学生に最適な教材を選択し、その指導を行ううえで最適な指導を提供することが、受講生にとって最大の利点であり、それを可能にしているのが電子カルテである。

3.2. 電子カルテの詳細

データベースソフトとしては、FileMaker Server Advancedを使用し、本学長久手キャンパス語学教育センターのサーバ室にあるサーバで運用している。Web公開機能を利用して、全学英語教育運営委員会の教員と外国語教育センター職員にアカウントを発行し、Webブラウザ経由で利用している。学内の特定の場所からのみクライアントのアクセスを許可するため、IPアドレスによるアクセス制限を行っている。さらに、安全性に配慮して、学内ではあるが、暗号化通信のプロトコルSSLを使用している。

5) 具体的には次の3.2節で述べているが、教員、職員、大学院生とステータスの異なるスタッフが複数で受講生情報にアクセスする際の管理が行いやすい。紙ベースの記録やワープロや表計算ソフトの電子ファイルによる情報のやり取りでは、管理が煩雑になる上、安全性や指導の迅速性が失われる可能性がある。さらには、電子カルテ以外の方法による受講生情報の管理は、受講生の紐付けされた横断的観点からの分析や、異なる受講生間に見られる共通した傾向とその解決方法の発見などの指導上の有益な情報収集や知見の蓄積・伝達が行いにくい。

6) 教育分野は異なるものの、ピアレビューを導入した最近の教育実践報告としては北、山梨(2007)を参照。

2003年度から設定した電子カルテは、関係する教職員が利用することを前提としていた。そのため、入学から卒業までのTOEICスコアの詳細や英語科目・授業外の英語プログラムの参加履歴等の電子カルテの情報を、主に学生の英語学習相談に活用してきた。

しかし、大学院生が本プログラムの指導担当者として電子カルテにアクセスする場合の個人情報保護の安全性を検討した結果、大学院生がログインした場合、本プログラムのポータルサイトがスタートページとなり、TOEICスコアは表示しないように本プログラムの開始にあわせて、設定を変更した。

また、本プログラムを受講していない学生の情報が不本意に流出するのを防ぐため、大学院生が電子カルテにログインした場合、受講生および過去の受講生の本プログラムに関する部分のみが表示されるように設定した。指導担当者の大学院生には、個々に異なるアカウントを発行し管理している。

プリントコースの添削プリント表示画面一例は、具体的には図1に示されているとおりである。指導担当者名、受講生のメールアドレス、学生からの応募時のメッセージ、受講生の面談可能時間、学習計画、指導担当者からの1週間ごとのアドバイス内容、アドバイス送信日時、添削プリントの画像等の情報が記載されている。

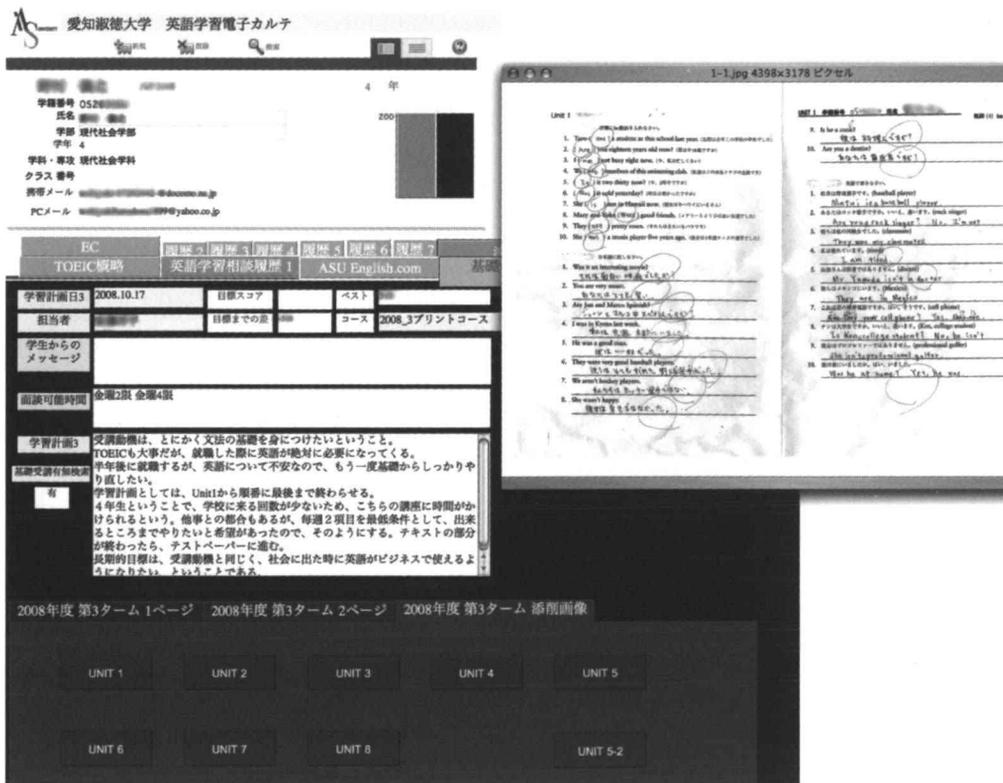


図1 プリントコースの添削プリント表示画面

指導担当者は、プリントの単元をクリックすると受講生の単元ごとの添削プリント画像を閲覧できる。その添削画像情報をもとに、1週間ごとにどのようなアドバイスを行うべきかを検討する。その際、過去のアドバイス例や他の指導担当者のアドバイス例も電子カルテで参考にできるので、過去の蓄積をもとにした、よりの確なアドバイスを毎週受講生に行うことになる。さらには、そのアドバイスが有効であったのかどうかの検証やアドバイスに対する受講生の反応の推移も、図1とは別の画面に記入されているアドバイスのデータ一覧を検索・活用することで可能となる。

4. 成果と考察

4.1. TOEICスコアの分析からの考察

この節では、「基礎からのやり直し英語」受講生の受講前TOEICスコアと受講後TOEICスコアを比較し、本プログラムの効果を検討する。表2は、すべての受講生のうち、受講前と受講後のTOEICスコアデータが利用可能な2005年度から2007年度の受講生のTOEICス

コース名	調査対象者数	TOEICスコアの伸び (全体平均)	TOEICスコアの伸び (最大)
プリントコース	77名	78.0	255
		284.6 → 362.6	310 → 565
インターネットコース	44名	68.9	340
		321.6 → 390.5	255 → 595

表2 「基礎からのやり直し英語」受講前後のTOEICスコアの伸び（一覧）

コアの変化をまとめたものである。

それぞれのコースの受講生の受講前TOEICスコアと受講後TOEICスコアを散布図で示したのが、図2である⁷⁾。図2では、 x 軸（横軸）に受講前のTOEICスコアを、 y 軸（縦軸）に受講後のTOEICスコアをとっている。 $y=x$ の斜め45度の線よりも上側にある点は伸びを示した学生を表し、この線よりも下側の学生は本プログラムの受講後にTOEICスコアが下がってしまった学生を表している。大多数の学生が本プログラムの受講によってTOEICスコアが上昇していることが分かる（プリントコースでは83.1%、インターネットコースでは72.3%の学生のスコアが上昇している）。

7) 散布図に示したR二乗係数(R²)は、1に近いほど、回帰直線が元のデータにあてはまっていることを表す。

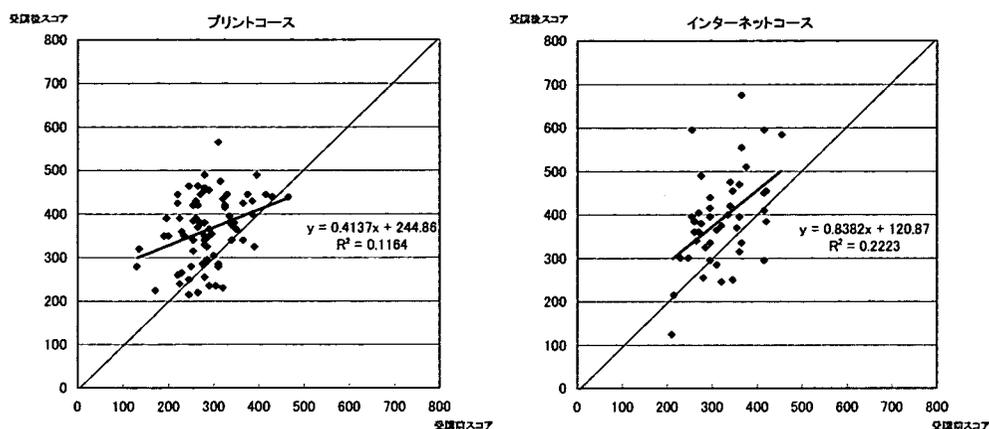


図2 「基礎からのやり直し英語」コース別受講前後のTOEICスコア

図2の近似曲線からは以下のことが読み取れる。プリントコースでは、受講前TOEICスコアの低い学生に対しては高い伸びが見られるが、受講前TOEICスコアが400点前後の学生を境に、スコアが高い学生に対してはそれほどの効果が見られない。これは習熟度の低い学生に照準を合わせた教材を選択したことと関連があると思われる。また、インターネットコースでは、受講前TOEICスコアの高低にかかわらず、すべての学生に対して一定の成果があったことがうかがえる。これは、受講生の習熟度や正解率に応じて出題問題が変わるというe-learning教材の特性とも関わるとと思われる。

2変数X, Yがn組あった場合の相関関係を調べるためには、一般にピアソン積率相関係数が用いられる。ピアソン積率相関係数rは、「変数Xと変数Yの共分散」と「それぞれの変数の標準偏差」から次の数式で求められる。

$$r = \frac{\text{変数Xと変数Yの共分散}}{\text{変数Xの標準偏差} \times \text{変数Yの標準偏差}} = \frac{\frac{1}{n-1} \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})(Y_i - \bar{Y})}{\sqrt{\frac{1}{n-1} \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2} \sqrt{\frac{1}{n-1} \sum_{i=1}^n (Y_i - \bar{Y})^2}}$$

$$\text{ただし、} \bar{X} = \frac{\sum_{i=1}^n X_i}{n}, \bar{Y} = \frac{\sum_{i=1}^n Y_i}{n}$$

相関係数 r は2つの変数の関係の方向（正か負）と強さ（絶対値）を示すもので、 $-1 \leq r \leq 1$ の範囲で示され、その解釈は通常、表3のように行われている⁸⁾。

相関係数 r の絶対値	解釈
0.0～0.2	ほとんど相関がない
0.2～0.4	弱い相関がある
0.4～0.7	中程度の相関がある
0.7～1.0	強い相関がある

表3 相関係数 r の解釈

本稿では、相関係数 r の算出に、統計言語「S言語」をオープンソースとして実装し直したフリーの統計解析ソフト「R」を使用した⁹⁾。相関係数 r は表4のとおりである¹⁰⁾。

コース名	相関係数 r
プリントコース	0.34
インターネットコース	0.47

表4 「基礎からのやり直し英語」受講前後のTOEICスコアの相関係数 r

いずれのコースについても、相関関係があると言え、「基礎からのやり直し英語」が効果的であったことが示せる。

4.2. 学生のアンケートからの考察

本プログラムを受講した学生全員に対し、受講終了後、オンラインによりアンケートを送付し回答を求めた。その結果、プリントコースにおいては、のべ受講生数304名中94名

- 8) 田中・山際 (1992: 188), 石村 (1993: 35), 森・田中 (2003: 38) など。
 9) R Development Core Team (2006). R: A language and environment for statistical computing. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria. ISBN 3-900051-07-0, URL <http://www.R-project.org>.
 10) 統計解析ソフト「R」での出力結果は以下のとおりである。なお、求めた相関係数 r が有意かどうかを調べる方法として、相関係数の有意性検定（無相関検定）がある。これは、本当に相関が存在するかを確かめる検定で、 p 値が0.05を下回った場合、相関係数は有意であるとされる。無相関検定の結果も「R」の出力に含まれる。ここでは、プリントコースとインターネットコースいずれの場合も、 p 値が0.05を下回っており、相関係数は有意であると言える。

プリントコース	インターネットコース
Pearson's product-moment correlation data: x and y t = 3.1431, df = 75, p-value = 0.002395 alternative hypothesis: true correlation is not equal to 0 95 percent confidence interval: 0.1268734 0.5250187 sample estimates: cor 0.3411576	Pearson's product-moment correlation data: x and y t = 3.4652, df = 42, p-value = 0.001234 alternative hypothesis: true correlation is not equal to 0 95 percent confidence interval: 0.2030682 0.6740456 sample estimates: cor 0.4715219

「R」の出力結果

（回収率30.9%）から、インターネットコースにおいては、のべ受講生数165名中58名（回収率35.2%）から有効回答が得られた。回収率の低い原因としては、1) 学生がメールアドレスを頻繁に変更するため多数のアンケートが送信されなかったこと（エラー率は回収率とほぼ同程度）、2) 本プログラムを複数回受講した学生に対しては、一度回答してもらえばよいと明記したこと（ただし、複数回回答してくれた学生もいる）の2点が挙げられる。回収率は決して高くないものの、返信してくれた学生の回答からは、プログラムの成果が感じられるものや今後もプログラムを継続していくうえで非常に参考になるものがあった。アンケート全文はAppendixに記載したとおりである。

ここで、アンケートに記載のA～Eの5つの質問に対する回答を分析する。

質問A：自分のプログラムへの取組を評価すると？

質問B：英語の基礎力に自信ができましたか？

質問C：自分のペースで学習できましたか？

質問D：自分の英語学習の弱点がわかりましたか？

質問E：受講して満足でしたか？

プリントコースおよびインターネットコース受講生の質問A～Eに対する5段階評価（数値が大きいほど高い評価を示す）の平均値と各評価の割合は図3および図4のとおりである。

プリントコースおよびインターネットコースからは、ほぼ同じような結果が得られた。図3および図4に見られる平均値（左図）ではすべての項目が3.00～4.00の間に位置しており、特に大きな特徴は読み取れないが、評価の分布（右図）においては以下に述べる点が注目される。

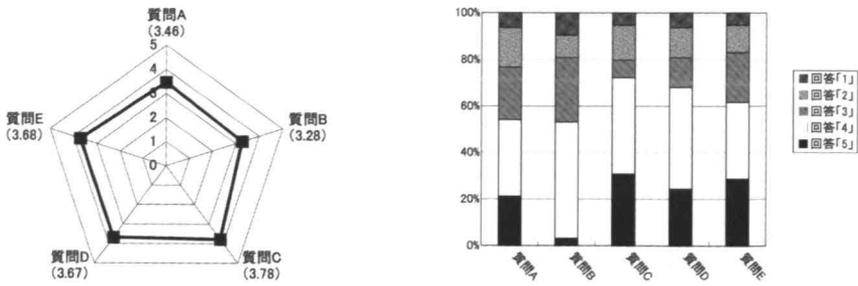


図3 質問A～Eに対する5段階評価の平均値（左）と割合（右）
（プリントコース受講生）

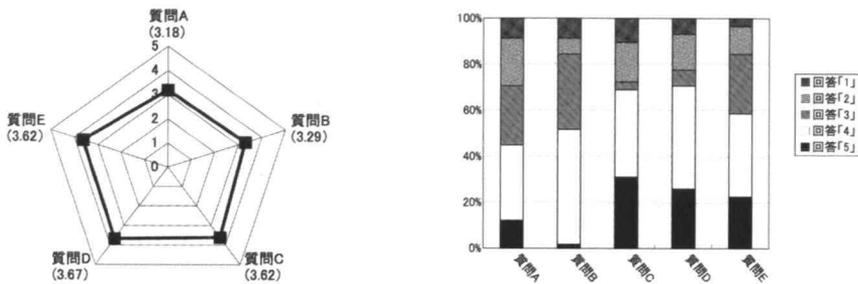


図4 質問A～Eに対する5段階評価の平均値（左）と割合（右）
（インターネットコース受講生）

質問B「英語の基礎力に自信ができましたか？」という問に対して、プリントコースを受講した学生もインターネットコースを受講した学生も、50%以上が5段階評価の回答5または4の「(自信が) ついた」「まあまあついた」と評価している。さらに、質問D「自分の英語学習の弱点がわかりましたか？」に対しては、およそ70%が回答5または4の「(弱点が) わかった」「まあまあわかった」と評価している。英語に自信がなく苦手意識を持ちながらも、何を学習すればよいのかわからなかった学生がこのプログラムに申し込んできたであろうことを考慮すると、この結果は本プログラムの大きな成果であると言えよう。学習させた内容は英語の非常に基礎的な部分であったが、その学習を達成させることにより、自分の英語の弱点を発見させ、学習者に自信を与えることができたのである。

次に、アンケート内のコメントをいくつか挙げ、検証を行う。満足した理由は主に以下のようなものである。

- I. 英語の基礎の復習ができて、また一から英語を学習することができたのでよかったです。（インターネットコース）
- II. 英語を学習しようと思って最後までできたことがなかったが、今回は自分で調べながら進めることができた。（プリントコース）
- III. 苦手なところがわかって、何を頑張らなければならぬかが明確になりました。ま

た、英語を日頃から続けて勉強していかないと力はつかないということがわかって、勉強する気持ちが湧いてきました。（プリントコース）

- IV. インターネット指導や、面談が何度もあることによって、モチベーションがあがり、よかった。（インターネットコース）
- V. 丁寧に添削されてあったため、次も頑張ろうという意欲がわいた。（プリントコース）
- VI. 先生がメールを送ってくださることで「見ていてくれている！」と思えてやる気が出ました。（インターネットコース）
- VII. アドバイザーの方に英語学習について相談できるのがとてもよかった。（プリントコース）

満足の理由は、「基礎から学習でき弱点を知ることができたこと」（I～III）と「担当者の熱心な指導」（IV～VII）の2つに大別できる。数値の分析でも触れたが、コメントからも、英語を基礎から学習したことは学習者の自信につながったことが読み取れる。さらに、面接や添削指導を丁寧にやったことが、学習者の学習意欲をおおいに助けていることがわかる。

また、不満足だった理由としては、以下のものがあつた。

- i. 自分の取り組み方（覚え方）がいまいちだったかもしれない。これは完璧とまではできなかつた。その場でその問題は分かつたけど少し問題を変えられると分からなくなる。（インターネットコース）
- ii. 全部できなかつたので、まだまだ不安な点がある。（インターネットコース）
- iii. 大学生なので当たり前かとも思うのですが、自由度が高いため、余程積極的に取り組まないと自分の糧にはならないですね… せっかくのやり直しであつたのにあまり充足した物にできなかつたことが残念でした。また行う場合はそんなことのないようにしたいと思います。（プリントコース）
- iv. やるべきことがたくさんありすぎてあまり計画的に学習できなかつたのが残念ですが提出も返却もすべて終わったとしてもそのままにするのではなく何度も復習したりして今後の英語の学習に役立つように一生懸命努力します！（プリントコース）
- v. 基礎を確認できたが、TOEICで点数が取れるかは別だと思つた。やはりやる気だろつと思つた。自分のペースだとたると毎日続かないので、逆にレポートのように提出期限があると頑張れたかなと思つた。（プリントコース）

不満足の理由は、「最後まで学習できなかつたこと」（i, ii）と「学習が個人のペースに任されたこと」（iii～v）に大別される。本プログラムではどこを到達点とするかは決めておらず、また目標および英語力には個人差があるため、担当者との第一回面接時に学習計画を相談して決めることにしていた。最初はやる気が充分にあるため、当初の目標を高くしすぎて

途中で挫折してしまう受講生がかなりいたことは確かである。しかし、それを反省点として次こそは頑張ろうと思ってくれていることはたいへん喜ばしい。また、学習が本人のペースに任されたことへの不満については、次のような原因が考えられる。受講生の多くはどちらかという英語嫌いの学生であろうとの判断により、本プログラム受講が学習者の負担にならないよう、担当者には学習進行上のアドバイスは依頼したが、強制的に課題提出等を促すことは避けてもらった。その結果このような意見が出たと思われる。

到達度により意見が満足・不満足に分かれてはいるものの、満足・不満足の理由のコメントからは、受講生が高い志を持って本プログラムに臨んでくれたことが伺われる。また、本プログラムが個人指導を基本としており、担当者から個人的にアドバイスを受けられたことは、受講生の学習意欲を非常に鼓舞したように思われる。これらは本プログラムを高く評価できる点であろう。

最後に、今後のプログラムの運営に参考となる以下のようなメッセージがあったことを記す。

- ・プリントを返却してもらうときに、いつ頃取りに行っているのかわからなかった。センターの中に貼紙とかがしてあるとわかりやすかった。
- ・もう少し、タームで何をするか、どんなテキストかが始める前にわかるようにしてほしいです。

これらの意見は、今後の課題として真摯に受け止め、これからは受講前にプログラム内容が明確にわかるよう改善していきたい。

5. まとめ

本プログラムの第一の成果は、受講生に英語学習に対するモチベーションを与えられたことである。指導担当者が丁寧に一对一で個別対応したことで、受講生のモチベーションを高められたのではないだろうか。ゾルタン・ドルニェイは「とりわけ教室環境では、ひらめきや天の啓示のように生徒の考え方を瞬間的に変えてしまうような、動機付けを高める劇的な出来事に出会うことはまれである」¹¹⁾と述べている。本プログラムでは場を教室ではなく、一对一指導とすることにより、学習者のモチベーションを高め、効果的な学習へと導くことができた。第二の成果は、そのモチベーションを受講生の英語に対する自信へと結びつけることができたことである。絶対にわかっているはずと思われる非常に基礎的な部分から学習させたこと、英語力がさまざまである受講生のつまずきや疑問に指導担当者が丁寧に対応し

11) ゾルタン・ドルニェイ (2005: 26)

たことで、受講生は達成感を味わい、英語に対する自信を持つことができたのであろう。天満美智子は、英語の授業への興味を喪失するのは、中学1年生と高校1年生の1学期に集中していることを挙げ、「子どもたちのつまずきの最大の原因は、英語の授業が『わからない』ということである」¹²⁾と指摘している。さらに、その「わからない」は「先生の説明がわからない」ことであると言い換えている。わからないままとなっていた学生が本プログラム受講で丁寧な個人指導を受けることにより、不安が自信へと変わったのである。この自信は、さらに受講生の今後の英語への取組の変化につながると思われる。また、天満は「わたしは、学校教育では基礎学力をつけることが1つの大きな目標だと信じているので、『基礎しか』という考えにはついていけない。『基礎』ということばを、単に『初等の、初歩的な、やさしいこと』とだけ解釈して、『基礎的な、根本的な、重要なこと』という意味のあることを忘れていてのではないだろうか」¹³⁾とも述べている。この指摘は、我々の構築した本プログラムが決して間違っただけのものではないことを裏付ける力強い味方である。

本プログラムを実施するうえで、電子カルテが利用できたことには大きな意義があった。電子カルテに受講生の学習状況が随時反映されることにより、担当者が的確にアドバイスすることができた。また、電子カルテは、受講生の受講前後のTOEICスコアの変化を見ることや、受講後卒業までの英語学習状況を追跡するうえでも大いに役立っている。

1998年（平成10年）改訂の高等学校学習指導要領は、中学3年間で学習した400語程度を加えた1,300語を英語Iで学習し、英語IIは500語程度を加えて1,800語程度の単語量で学習をするように規定された。これは大学生に求められる5,000語程度の単語とはかなりかけ離れた数字になる。単語の学習量ひとつをとっても、総体的に、英語の基礎力が低下していることは明らかである。文法や語彙についての学習が軽視され、新科目「オーラル・コミュニケーション」が設立され、学習内容・指導の方向性は大きく変わっている。

高等学校の学習指導要領にはそのような大変革があるにもかかわらず、大学における英語教育は斬新な変革を行ってはいるとは言えない。本学においても、当初は、中学・高等学校の英語の復習ともいえる授業科目を設定するには大きな抵抗があった。英語の基礎力養成は大学に課せられたものではないという大学のプライドがあるのも当然のことであるが、実際にはどれほどの基礎力が不足しているのかを把握することができていなかったのも事実である。授業科目外のプログラムとして「基礎からのやり直し英語」を設定したことは、このような事情によるものであるが、このプログラムを実施したことにより、英語の基礎力が学生のその後の英語力強化に不可欠であること、そして、想像を絶するほど英語力が不足している学生がいることもわかった。

我々が本プログラムに参加してほしいと思う学生は、英語に対してコンプレックスを持っている学生、英語が必要だと思っても実力が伴わないと思いついでいる学生である。そ

12) 天満 (1982: 21)

13) 天満 (1982: 46)

のような英語に対して消極的な気持ちの学生に、いかにして本プログラムに参加させるかは大きな課題であり、そのために教員にかかってくる負担は通常の英語科目とは比較にならないほど大きい。また、授業外プログラムとして継続していくには教員および事務スタッフに大きな負担がかかるうえ、学生への強制力がないこともあり、学生にプログラムを周知徹底させることが困難であることもわかった。この結果をうけて、全学英語教育運営委員会は、「基礎からのやり直し英語」に相当する授業科目「英語コミュニケーション基礎」を2008年度から提供することにした。ただし、中学校・高等学校レベルの英語基礎力の養成を目標とするという授業内容を鑑みて、大学の授業科目として位置づけることに抵抗感もあったため、この科目の修得単位は卒業要件単位に含まないものとするようにした。「英語コミュニケーション基礎」は授業科目外のプログラム「基礎からのやり直し英語」と同時に履修できるシステムをとり、短期に基礎力を養成することができるようになっていく。「英語コミュニケーション基礎」はまだ2008年度前期開講の授業を終了したのみであるため、現時点でその成果についてデータを用いた検証はできないが、授業担当者が教室で直に学生の声聞きながら授業を進めることができることもあり、履修者の反応は良い。

2008年度をもって「研究助成」期間が満了し、「基礎からのやり直し英語」は今年度をもって終了することになっている。しかし、全学英語教育運営委員会では、2009年度は引き続き授業科目「英語コミュニケーション基礎」を実施することを決定している。また、さらに現実を直視し、2010年度からは「Basic English 1」「Basic English 2」の2つの授業科目を基礎力養成英語科目として設定し、その修得単位も卒業要件単位に含めることとしている。この2つの科目の導入により、本学の全学生に対して、大学英語への準備のための授業科目を提供することになる。少しでも多くの学生のモチベーションを向上させ、実力養成に貢献できればうれしい。すべての学生に対しての英語教育の第一歩は基礎力の確認であることを実感しながらも、いつの日か、大学の英語カリキュラムの中にこうした基礎力養成授業を設定しないですむ時が来ることを切に願っている。

最後に、これまで本プログラム運営を支えてくれた本学職員の宮野 恵さん、内藤昌恵さん、プログラムスタッフの野田実紀さん、酒井佳美さん、高荒万陽さん、藤田美由紀さん、木幡智子さん、大野彰子さん、島津万佑子さん、そして、窓口となって学生に直接対応してくれた外国語教育センターのスタッフ、丁寧に添削・面接指導にあたってくれた多数の本学大学院生にこの場を借りて感謝の意を表したい。多忙な中、スタッフが地道にデータを収集してくれたお陰で「基礎からのやり直し英語」を小論としてここにまとめることができた。担当教員一同、ここに心より感謝する。

参考文献

- 石村貞夫（1993）『すぐわかる統計解析』，東京，東京図書。
- 小野 博（2008）「内外のリメディアル教育におけるICTの活用の現状と展望」，『メディア教育研究』第5巻第1号，pp. 1-10，メディア教育開発センター。
- 神本忠光（2006）「高校の『ゆとり教育』で大学生の英文法力がどう変化したか—10との比較」，『熊本学園大学文学・言語学論集（*KGU Journal of Language and Literature*）』13(2)，pp. 249-77，熊本，熊本学園大学。
- 北 栄輔，山梨樹里（2007）「Peer Reviewに基づいたプログラミング実習授業支援ツールの開発」，『名古屋高等教育研究』，第7号，pp. 341-53，名古屋大学高等教育研究センター。
- ゾルタン・ドルニェイ，米山朝二・関 昭典訳（2005）『動機づけを高める英語指導ストラテジー35』，東京，大修館書店。
- 田中 敏，山際勇一郎（1992）『ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法：方法の理解から論文の書き方まで』，東京，教育出版。
- 田部井潤，飯田考充（2003）「第三者による授業評価分析の試み—学生参加型授業を事例として」，『大学教育学会誌』Vol. 25, No. 2, pp. 119-25，大学教育学会。
- 天満美智子（1982）『子どもが英語につまずくとき』，東京，研究社出版。
- 中川アユミ（2006）「高等学校学習指導要領改訂（2003年導入）の影響とその対応策—英語教育の視点から（ゆとり教育を受けた学生への対応—総合教育を中心に—）」，『大阪医科大学雑誌』65（2），pp. 126-30，大阪，大阪医科大学医学会。
- 森 真，田中ゆかり（2003）『なっとくする統計』，東京，講談社。
- 文部科学省（2007）『高等学校学習指導要領』。
- 文部省（1999）『学習指導要領解説—外国語編，英語編』。
- Benesse教育研究開発センター（2005）「SELHi指定校レポート case study 6 福岡県福岡県立香住丘高校」，『VIEW21（高校版）』，2005年度特別号，pp. 25-9。

Appendix

「基礎からのやり直し英語」受講者アンケート



「基礎からのやり直し英語」を受講してみていかがでしたか？
皆さんの率直な意見を聞かせて下さい。プログラムの改善・報告に活用させていただきます。

1 お名前 学籍番号
(フルネームをお願いします。)

2 受講したコースとタームに✓をつけて下さい。(複数受講した場合は、全て)

- | | | | |
|------|---|--|---|
| 1回目: | <input type="checkbox"/> 2005年度
<input type="checkbox"/> 2006年度
<input type="checkbox"/> 2007年度 | <input type="checkbox"/> 第1ターム
<input type="checkbox"/> 第2ターム
<input type="checkbox"/> 第3ターム
<input type="checkbox"/> 第4ターム
<input type="checkbox"/> 第5ターム | <input type="checkbox"/> プリントコース
<input type="checkbox"/> インターネットコース |
| 2回目: | <input type="checkbox"/> 2005年度
<input type="checkbox"/> 2006年度
<input type="checkbox"/> 2007年度 | <input type="checkbox"/> 第1ターム
<input type="checkbox"/> 第2ターム
<input type="checkbox"/> 第3ターム
<input type="checkbox"/> 第4ターム
<input type="checkbox"/> 第5ターム | <input type="checkbox"/> プリントコース
<input type="checkbox"/> インターネットコース |
| 3回目: | <input type="checkbox"/> 2005年度
<input type="checkbox"/> 2006年度
<input type="checkbox"/> 2007年度 | <input type="checkbox"/> 第1ターム
<input type="checkbox"/> 第2ターム
<input type="checkbox"/> 第3ターム
<input type="checkbox"/> 第4ターム
<input type="checkbox"/> 第5ターム | <input type="checkbox"/> プリントコース
<input type="checkbox"/> インターネットコース |

<参考>

第1ターム: 5月～7月
第2ターム: 8月～9月
第3ターム: 10月～11月
第4ターム: 12月～1月

3 A. 自分のプログラムへの取組を評価すると？

1. ほとんど取組まなかった 2. あまり取組まなかった 3. 普通 4. まあまあ取組んだ 5. 積極的に取組んだ

4 このプログラムを受講して、

B. 英語の基礎力に自信ができましたか？

1. できなかった 2. あまりできなかった 3. 変わらない 4. まあまあついた 5. ついた

C. 自分のペースで学習できましたか？

1. できなかった 2. あまりできなかった 3. 変わらない 4. まあまあできた 5. できた

D. 自分の英語学習の弱点がわかりましたか？

1. わからなかった 2. あまりわからなかった 3. 変わらない 4. まあまあわかった 5. わかった

E. 受講して満足でしたか？

1. 満足ではない 2. あまり満足ではない 3. 普通 4. まあまあ満足 5. 満足

具体的に教えて下さい。

5 その他、気づいた点や困ったことなど、プログラムについての感想を教えてください。

このアンケートに関して不明な点は、各キャンパスの外国語教育センターに問い合わせして下さい。
ご協力ありがとうございました。

愛知淑徳大学

全学英語教育運営委員会
外国語教育センター